

2019年7月

2019年度 読書運動のテーマが“新旧”に決まりました。

今回は、このテーマに関連して『滅びゆく日本の動物50種』 上野俊一編著 築地書館 1993 をご紹介したいと思います。昔は普通に存在していたある動物たちが絶滅している、または危機に瀕している、どうしてそうなったのか原因を知ること、これから私たち人間は動物と共存して行くにはどうしていくべきかを考えさせてくれる本です。

この本では、50種類の動物を紹介し、それぞれの動物のページには、絶滅種（日本ですでに絶滅したと考えられる種または亜種）・絶滅危惧種（絶滅の危機に瀕している種または亜種）・危急種（絶滅の危険が増大している種または亜種）・希少種（存続基盤が脆弱な種または亜種）・地球個体群（保護に留意すべき地域個体群）のいずれかの区分が記載されています。また、巻末にはこの5種類の区分ごとに、動物の名前が記載されているので、分かりやすくなっています。

それぞれの動物のページでは、いつ頃まで日本のどの辺りに生息していたのか・生息しているのか、その動物の特徴、そしてなぜ衰退していくことになったのかなどが記載されています。

絶滅種のニホンオオカミをはじめ、たくさんの動物が、現在すでに絶滅していたり、危機に瀕しています。今、カワウソが大人気ですが、実は日本にもかつては“ニホンカワウソ”が存在していたのです。この本で、ニホンカワウソは1965年に国の特別天然記念物に指定されて絶滅危惧種であると記載されていますが、この本が出版された後、環境省によると2012年に絶滅種になったことを公表しています。このように刻一刻と動物が絶滅しているのです。

これら動物が衰退していく背景には、人間による動物への乱獲と環境破壊が主な原因として挙げられます。また、環境破壊には開発・森林伐採・石炭岩の採掘の3種類があります。主に鳥獣類は乱獲によるもの、小動物は開発によるもの、草食動物また草食動物を捕食する肉食動物は森林伐採によるもの、洞窟動物は石炭岩の採掘によるもので衰退することが多いのです。

この地球上で、人間だけでは生きていくことができません。他の生き物が存在しているから人間も生活していけるのです。ピラミッド型の食物連鎖にも言えると思います。一種でも崩れてしまうと、他の生き物にも影響がでてきてしまう…。

人間による乱獲を規制するためには、やはり捕獲や採集を制限したり禁止する法律が重要になってくると感じます。

環境破壊においては、持続可能な開発が大切であることを改めて感じました。人間の生活を発展して行くには、必然的に自然破壊は起きてしまいます。開発する上では、そこに棲む動物への配慮も必要になると感じています。戦後の一時期、スギやヒノキを必要とした人間は、草食動物が好む広葉樹を伐採して針葉樹を植林し、単一種の林になり、草食動物や肉食動物が衰退した点からも、やはりそこに棲む動物の特徴を配慮しながらの開発が必要になってくると感じます。石炭岩の採掘についてもどういった動物がいるかを調査し、動物に対して配慮した計画を立て、採掘してほしいと願います。